

## 学 位 論 文 要 旨

### 研究題目

Sex Differences in Management and Outcomes of Cardioembolic Stroke: Post HOC Analyses of the RELAXED Study  
(心原性脳卒中の治療や治療成績における性差について: RELAXED 研究の事後解析)

脳神経外科学 (指導教授又は研究科紹介教授 吉村 紳一)

氏 名 岡田 崇志

世界的に、脳卒中は長期的な障害と死亡の主な原因である。年齢別の脳卒中の発生率と死亡率は女性よりも男性の方が高いが、加齢に伴う脳卒中の発生率増加によって、男性よりも長寿である女性により多くの影響が及ぶことが予想される。脳卒中を発症した女性は、高血圧症、心房細動などの罹患率が男性と比較して高いが、冠動脈疾患や末梢血管疾患、喫煙の罹患率は低い。また、t-PA 静注療法、脳血管内治療、脂質検査を受ける可能性は低い。一方で、脳卒中後の女性は男性と比較して生存率は高いものの、機能的転帰は悪く、うつ病の合併も多く、生活の質が低くなると報告されている。これらの原因として、基礎研究領域において、マウスモデルを用いた実験では、虚血性脳卒中に応答した神経機能の調節及び保護における生物学的及びホルモンの性差が示されているが、人における、脳卒中の性差の理由は不明である。

日本人を対象とした以前の研究では急性虚血性脳卒中後の短期予後は、男性よりも女性の方が悪いと報告されている。また、70 歳台の女性は急性虚血性脳卒中後の退院時機能的転帰不良のリスクと関連しており、血管内治療の利用率の低下が女性患者の機能的予後不良の原因の一部である可能性がある。

本研究は、非弁膜症性心房細動による急性虚血性脳卒中又は TIA 患者において、急性期にリバーロキサバンを投与された症例に関して、虚血性脳卒中の再発及び大出血のリスクを性別に評価し、そのリスクとリバーロキサバンの治療開始時間との関係を調査するために設計された。また、本研究の解析は、リバーロキサバンの急性早期投与による虚血性脳卒中及び非弁膜症性心房細動を伴う患者の治療結果の精査を調べた RELAXED 研究のデータを利用した。本研究は、90 日後の転帰に対する性差を解明する糸口になると考え、脳卒中発症時の梗塞量を評価した。性差を評価した今までの研究と異なり、この研究の全患者はリバーロキサバン単独で治療されている。従って、この研究は、独創的であり報告する価値があると考えた。